長編ハードアクション

TENZAN BUNKO

刑事たちの伝説

志津三郎

天山文庫

刑事たちの伝説

著　者―志津三郎
発行者―服部将太
発行所―株式会社天山出版
東京都文京区本郷2―3―9　〒113
☎03(818)0434
発売所―株式会社大陸書房
東京都文京区本郷2―3―9　〒113
☎03(814)7441(営業)
郵便振替　東京1―5661 2
FAX　03(814)5890
印　刷―㈱光邦
製　本―小林製本所

乱丁・落丁のものは、小社またはお買い求めの書店にてお取替えいたします。
定価はカバーに表示してあります。
©SABURŌ SHIZU 1988
ISBN4-8033-1410-1

大山文庫

刑事たちの伝説

志津三郎

TENZAN BUNKO

刑事たちの伝説

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

プロローグ

東京、新宿の西北。
都電の終点で、神田川が流れこんでいる早稲田あたり。
春さきの二十五日、午後一時すぎ、その伝説の幕があがった。
かまぼこの板を呑みこんだ蛇の腹のように広くなった道路がある。
その広い道路。つつじを植えた中央分離帯をもつ、片側三車線の直線道路のはるか彼方、江戸川橋の方向から、かすかな爆音が聞えてきた。
爆音は、ひとかたまりになったエンジンの音であった。爆音は、そこで黒い点のような細胞を生んだ。
爆音は襲来する津波のように、刻々と接近し、細胞はみるみるうちに増殖して、せりあがるように、その全貌を現わした。
およそ三十台のバイクの集団であった。
ヘルメットからジャンパーに至るまで、黒一色で統一したその集団をみて、街の人々は暴走

族であると判断した。

白昼のせいか、彼らは制限速度を守り、車線を区分した白い二本の線を踏んで、二列縦隊となり整然と行進していた。

暴走族としては神妙な走りかたであったが、轟き渡るエンジンの音は周囲を威圧し、ある種の秩序を保ったその儀式めいた黒装束の行進は、かえって無気味な雰囲気を漂わせて人々を怯えさせた。

直線道路を三分の二、約八百メートルを走破したところで、先頭の一人が手をあげて行進が止まった。

三十台のバイクは隊列を解いて、右側の協愛銀行西北支店の白い四角いビルの前に集合した。まず十五名がバイクのバリケードで入口を固めると、十五名がバイクを降りて、銀行のなかへなだれこんだ。

信じられないことだが、十五名の手にはいつのまにか拳銃が握られていた。

リーダーは、カウンターの上に仁王立ちになって周囲に注意をはらった。集団は無言のまま行動していたが、その要求は、すべて行員には推察できた。かくて内部は一分たらずで制圧された。

通常、小さい商店街と住民を対象とする支店銀行の扱い高は、せいぜい一千万円程度である。

だが、この日は周辺の二つの工場の給料支払い日であったから、三千万円余りの現金が余分に用意されていた。二つを合せて四千万円余りである。

一ヵ所に集められた行員は、ヘルメットとシールドで顔を隠した、ロボットのような無気味な姿と人数に圧倒されて、ただただ傍若無人の振舞を茫然とながめているだけであった。だがひとりの行員が、ロボットの隙をみて警察に通じている非常ベルを押していた。

金庫の金は二分たらずで、三つの袋に収められた。リーダーは、それを確かめると手を振って引きあげを指示した。十五名は表に飛びだしてバイクにまたがった。

再び隊列が整えられた。

黒い集団は、エンジンを合唱させると、直線道路をUターンして悠々と走りだした。

その前方から、サイレンを鳴らしながら一台のパトカーが走ってきたが、反対車線で分離帯があるため、集団の前を遮ることもできず、喰いちがって急停車した。

パトカーからは二人の警官が飛びだした。分離帯を越えて「止まれ、止まれ」と連呼したが、集団はそれを無視して前進した。

いまや黒い集団は、直線道路の終る江戸川橋のあたりで、予定通り解散しようとしていた。その地点からは、三つの幹線道路と五つの枝道に分れていた。そこからはさらに網の目のように張りめぐらされた、せまい路が四方八方に散っている。その網の目を走り抜ければ、まずパ

トカーに出会うことなく、全員の脱出は可能であった。

その寸前、直線道路があと二百メートルで終るというとき、忽然と、七つの人影が横一列になって彼らの行く手にたちふさがった。

七人の人影は西北署の刑事たちであった。七人の刑事は三車線いっぱいにひろがり、いっせいに歩きだした。勇ましい行進曲（マーチ）が聞えてきそうであった。

そして信じ難いことが起った。

黒い盗賊たちは刑事たちに対し、同じく三車線いっぱいに十台のバイクを並べ、三列の陣を敷いていっせいに拳銃を引き抜いた。

まず、第一列が猛然と七人の刑事にむかって襲いかかった。銃弾と爆音が炸裂した。たちまち大騒音が周囲を震撼させた。

七人の刑事はすこしもたじろがず、その歩調を変えることなく突き進み、いつのまにか手にした拳銃で、第一列のライダーをなぎ倒した。隊列が乱れ、金属のぶつかり合ういやな音が連続し、バイクがよじれて、はねあがりきらめいた。盗賊どもは路上に放りだされて呻き声をあげた。

つづいて第二列が轟音と共に驀進（ばくしん）した。

再び双方の銃弾がはじけるポップコーンのように交錯した。またもや、数台のバイクがアス

ファルトを斜めに削って横転し、衝突した。そのうちの数台のバイクが、第一列のマシンの残骸に激突した。その瞬間、一台がどっと炎を吹きあげた。

当然、第三列の運命も決まっているようにみえた。だが彼らは、ひるまずアパッチのように雄叫びをあげて突進した。そして再度刑事たちの冷静な射撃でなぎ倒されて、ゼンマイのはじけた歯車のように散乱した。硝煙が漂い、ガソリンの黒い煙が炎を吹きあげて渦巻いた。まさにマッド・マックスの監督が、次回作に使いたくなるような破壊と暴力の地獄絵であった。

いまや、その地獄絵の舞台にたちはだかるのは、七人の刑事だけであった。

刑事のひとりが、さかさになったバイクの前輪を指にひっかけて廻した。前輪は午後の日射しをうけて、音もなくきらめきながら廻転した。

刑事たちは、ようやく駈けつけた数台のパトカーを認めると、直線道路を一列に並んだまま、テレビのラストシーンのような足どりでたち去った。

以上が刑事たちの伝説のあらましである。

この刑事たちは、俗に〝テレビ警察〟と呼ばれている西北署の精鋭である。

一つの形態が変化するときに伝説が生れるという。このおもしろすぎる（あるいは、ばかばかしすぎる）伝説にも、そのような価値と要素があるのかどうか。それは今後の問題である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

1

バイクの前輪は激しく空気をかきたて、きらめく風をまきおこして、ライダーの想念から勇ましい刑事たちの伝説を追いはらった。

さらにスロットルを開くと、エンジンは身震いして猛りたち、鎖を断ち切ったようにスピードがあがっていった。

早朝の名神高速道路。

これほどの道を、たった一台で走りながら制限速度を守っているというなら、それはよほどの偽善者にちがいない。

銀色のヤマハスポーツXJ750E。DOHC、直列四気筒、シャフト・ドライブ。

スタイルは地味だが、細部まで気を配った作りと秘められた性能は知る人ぞ知るで、わかっているやつなら、一目はおくマシンだ。難をいえば、急激なシフトダウンをすると、荒馬のように尻を振る癖があることだろう。まあ、それをどこまでねじ伏せることができるかが、腕の見せどころである。

黒いヘルメットはフランスのGPAである。あごひもなしで固定できる。そのシールドはライフルの銃弾を受けても貫通しないというが、試したことはない。

黒革のドライバースーツの左肩には、ＴＡＫＡＩの商標マークがついている。これで関西のライダーであると、およその見当をつけることができる。浜松から東京にかけては、ＫＵＳＨＩＴＡＮＩのマークが目についてくる。

彦根、米原、伊吹と過ぎて、低い山なみと丘陵地帯がつづく関ケ原あたり。前後に車の影もなく、孤独なスピードのなかに身をまかせていると、四月の風の突き刺さるような鋭さが、やがてやわらかく、やさしく体にまといつき、ついには光と音と時間が一つのハーモニーのなかに溶解していくのがわかってくる。

前方にトラックがみえてきた。バイクはみるみるうちに距離をちぢめて追い越した。トラックの運転手は歯がみをしてののしった。

まさかそのバイクが、楽々と二百キロのスピードを引っぱりだせるとは知らなかったにちがいない。

窓のそとでは、図体のでかいトラックがへたなＵターンをしようとして、ひっかかっていた。トラックの運転手は自分のヘマをののしっていた。

たちまち車が重なって渋滞しはじめた。

「あいつ、なにしとるんや」

横山部長は、大阪府警察署の三階の窓際にたって、図体をもて余しているトラックをながめていた。

捜査一課の西川課長が、早瀬刑事をつれてはいってきた。

「なんですか」

西川課長は窓際の部長のそばに並んで覗きこんだ。

「いや、なんでもない」

部長は、あわてて課長から飛びのいた。部長は課長と並ぶことを、日頃から極度にきらっている。大阪で、横山と西川が並べばどんな目でみられるか、それを気にしているのである。

横山部長は机に戻りながらいった。

「早瀬君やね」

「はい」西川課長と早瀬は、机の正面にたった。

「話は聞いていると思うが……君に、西北署勤務を命ず……これが辞令だ」

部長は白い紙片を早瀬に渡した。そのあと、部長はタバコに火をつけていった。

「辞令の内容についてももうわかっとるやろが、一応、わたしの口からいっておかねばいかんから、説明しておこう」

部長は咳ばらいをすると、次のように続けた。

近年テレビドラマのなかで、警察もの、捕物帖、ミステリーものの数量は大変なものである。一日で平均十本の、そういったドラマが放映されている。一ヵ月では三百本前後という、いやもう大変な流行である。

これに対して、現実の警察がこれだけの人気を得ているかとなると、残念ながらそうだとはいえないだろう。

これをいいかえれば、プロ野球より草野球のほうが人気があるということである。人気、実力、格好よさ、収入などの諸条件が、プロ野球より草野球のほうが上であるなどということは、まずあり得ないことである。そのあり得ないアホなことが、ほんものの警察に関する限り、そうなっておるのである。

「なんちゅう、情ないこっちゃ」

横山部長は首を振った。気にしているくせに、その喋りかたが、横山やすしそっくりになっている。

「これではあかん。現実の警察の人気と信用は落ちるばかり、ひいては警官の志望者も減るばかりや。

そこで、テレビに負けん、個性豊かな、愛される人気警察のイメージを作るべきやということになった。

簡単にいえば、テレビ警察のイメージを現実の警察にとりいれて、ものにしてしまえというこっちゃ。そして、そのモデル警察署として、東京に西北署が誕生した。知ってのとおり、われわれがテレビ警察と呼んでいるやつや。誕生以来まずまずの人気、成績で、マスコミもたびたびとりあげてくれるようになった。

なかでもテレビ警察の名声を不動のものとしたのが、暴走族銀行襲撃事件や。話に聞くと大変なものやったらしいね。あれだけのオートバイをぶっこわし、あれだけの人数を動員するということは、現在のテレビドラマでもなかなかできんらしい。製作費の問題があるし、なんといっても迫力がちゃう。さすがのテレビも、あれは真似ができん。やっぱりホンモノや、プロがやることは違うと頭をさげたそうや。あれ以来サインを貰いにくるファンが増えたというこっちゃ。警官がサインするんや！」

部長はくやしそうにサインの真似をした。

「……そういう成功から、テレビ警察を全国的なものにしようという機運がでてきた。大阪も近い将来、この形態をとりいれ、不祥事のイメージを一掃しようということになってきた。そこで将来の布石として、きみを研修員として、テレビ警察へ派遣することになったというわけや。二十七歳、独身、次男坊、男前で格好はええと条件は揃っとる。そこで白羽の矢をたてた。ま、ぜひとも多くのことを学び吸収して、大阪のテレビ警察創設の暁には、大いに有用の人物

となってほしいと希望している……まあ、こういうことや」
「わかりました」
早瀬は頭をさげた。
西川課長が口をはさんだ。
「きみはオートバイに乗るそうやが、東京へもあれでいくのかね」
「そのつもりですが……いけませんか」
「かまへん、かまへん。テレビ警察の玄関にばあーっと乗りつけて、大阪の刑事の格好ええとこみせたらどうや」
横山部長はけしかけるように、両手でハンドルを捌くまねをした。

ハンドルを軽く握った拳は、ほとんど動かす必要はなかった。百二十キロ。ただただ、むらのないスピードに身をまかせておればよかった。
横山部長の声が、まるで遠い過去のように風と共に消え失せた。すべての雑念が飛び去って空になっていた。ひょっとしたら、悟りの境地とはこんな状態になったときをいうのではないだろうか。
名神から東名に乗り入れて、豊田、岡崎、豊川を過ぎて、浜松で給油と食事をしたあとは、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong